読書

根来 澪子

私はある病気で小学校から中学校に上がるとき、一年休学した。学制改革で旧制女学校が新制中学校に変えられ、男女共学になる微妙な年度である。私の病気が何であったか、思い出したくないので書かない。私は１０代の前半で学校をまるまる一年休んで自宅療養したり、海辺の街に行ったりした。今思えばニートのような生活であったと思うが栄養をつけてひたすら休養していた。

その時、実に多くの本を読んだ。大学に進学していた兄の指導にもよる。兄は漱石や鴎外を中心に芥川龍之介、川端康成など明治や大正、昭和の文学史に残る文豪の小説を読むように指導してくれた。私は閑に任せてそれらを読みふけり、殊に漱石が好きでほとんどの作品を読破したと言ってもいいくらいであった。

だから文学に関してはそれなりの興味があった。復学して一年下の人たちと同学年になったとき、彼女たちがあまりにも本を読まず、明るく生活していることに驚いたものである。高校の時、国語の時間に短歌を作るように言われて書いたものが先生に絶賛された。どんな作品だったか覚えていない。書くことにも興味があったということである。「桔梗」をききょうと読むことが新鮮で「桔梗物語り」というようなストーリーを持つ物語を書いてクラスの仲間を喜ばせたりした。

しかし私が、決定的に何かを書くことを諦めたのは、高校２年の時に読んだ、三島由紀夫の『仮面の告白』によってである。まさしく衝撃であった。一行一行丁寧に読んでその文体に驚愕した。それまでの作品、『花盛りの森』や『煙草』をはじめ、彫刻のように研ぎ澄まされた文章に魅せられ、それによって私は自分が「書く」ことの虚しさを痛感したのである。私がどんなに勉強をし、努力をしても、このような文体を書くとこはできないと。それは私が書くことを諦めた大きな理由の一つである。

一応文学部の卒業だから、海外の小説など、興味に任せて読書はしたが、書くという行為はすっぽりと消えてしまっていた。専業主婦になって、「努力」ということがもっとも苦手な私は、安易で興味のあることだけするというわがままな人生を押し通し現在に至る。

私は神奈川県の西部H市に住んでいるが、子育てが終了後の趣味のほとんどを近隣のA市で行ってきた。A市は、H市よりも文化活動が活発で、一生の趣味であったはずのダンス（これは肉体的な問題で、７０代で頓挫せざるを得なかった）ももちろんだが、「近、現代歴史講座」など、興味のあるものが多く、定期を買って往復するほどの回数でA市に通い詰めていた。その中に、市が推奨する生涯学習「近代日本文学入門」という講座があり、参加した。講義は十数回程度で終ったが、それを母体として２００８年1月に「読書会２１」というサークルが発足した。私は当初からの参加者であったが、１５、６人の会員だったと思う。講座の内容は「逍遥、二葉亭四迷に始まる日本の近代文学から出発し、変遷する時代の中で折々の文学思潮を中心に作家と作品を取り上げる」というものである。講師は、定年を迎えた学校の先生で、実に要領よく、明治からの日本の近、現代文学を講義していただいた。先生は研究者になれるほど、文学史に造詣の深い方で私は心底から尊敬していた。

今や、テレビなどでも公認されているらしいほどの、新語にあふれた現状で、擬古文と言われる二葉亭四迷や広津柳浪等を読むのは苦痛でもあったが、時代を超えて尚感銘を与え続ける名作の、藤村をはじめ、花袋、秋声、秋江などの文章に触れるのは新鮮でもあり、ありがたかった。幸田露伴の『五重塔』を読んだときは、とても感動した。乱読ではなく系統的に文学史にあわせて作品を読んだのはよかったと思っている。その後、漱石や鴎外、芥川などに触れたのはもちろんである。

読書会の形式は、文学史の中から講師が指定した作家の作品を読み、毎回、輪番制で司会者を決め会員が読後感想を述べあい、最後に先生が作家についての詳細な説明をするというものである。作家についての好みなど、個人的にいろいろな意見があって読書会は毎回盛り上がり、たのしかった。

あるとき、その時期は全く記憶にないが、朝日新聞の編集室に籍を置いていたというK氏が入会してきた。勿論定年になってからのことである。

彼は博学多才たで会にとっても刺激的な存在だったが、入会して2年ぐらいたったころ、せっかく文学史を勉強しているのだから読書会の「会報」を作ったらどうかと提案した。A４サイズの用紙の裏表に、それぞれが分担した作家についての短い作家紹介、読後感想文、さらに各自の日常の感想、報告など、内輪なものではあるけれとも記録として残すために有意義では

ないかということである。先生が真っ先に賛成した。それぞれが負担を負うことになるが、やってみましょうということになり、年4号の季刊にして２０１４年1月に創刊号が発足した。記事は公平に会員が分担した。編集委員の一人に選んでいただいたことは大変ではあったけれど文面のレイアウトや割付けの方法など勉強になった。編集長の指示に従ってお互い意見を述べあって私達は紙面作りに熱中し、市役所や図書館や公民館、学習センターなどにも配布した。

会報は１７号、２０１７年1月号をもって終了となった。K氏の退会によるところが大きい。K氏はやむをえない家庭の事情で会を去った。会報の編集方法や割り振りなど、パソコン上でも特殊な技術が必要で、彼の後を継いで会報を存続できる人材が育たなかったのである。

「読書会２１」は現在も存続している。私と同年配の、８０代後半の会員は、先生をはじめ、皆、去っていった。鬼籍に入った人も何人かいる。春は日帰りの文学散歩、秋は2泊の研修旅行と、作家の足跡を求めて方々を旅した。藤村記念館のある馬籠、小諸の懐古園、金沢の武家屋敷、先生が人生の指針として尊敬している会津八一の愛した古都奈良等々、あの人この人と思いではつきない。いまや、ひと世代若返った会のなかで、しぶとく居座っている私は、労わられながら、それでも彼らの仲間になっているのがうれしい。最近は芥川賞候補作品が多く掲載されている文芸四大誌の新人作家の作品を読むことが多い。取り上げているテーマは時代によってあまり変わらないと思うが、現実をとらえる視点や文体は違っていて、やはり昭和の文学は遠くなったという感がある。平成を過ぎて今は令和、時代は流れていく。

最近取り上げた作品では、尾崎世界観（ペンネーム）の『面影』が印象的であった。彼らのような若い世代の感性がこれからの文学の世界を引っ張っていくのだろう。

玉石混合のなかから、古典として後世に残る作家は誰だろと興味を持って読み続けたいと思う。

手元には「読書会会報」１７冊がとってある。「１００冊読破記念」、「読書会１０周年記念特集号」など、私も何度か読書の感想文を書いてきた。読んだことさえ忘れた小説もあれば、鮮明に記憶に残っている小説もある。目下終活で多々の書類を整理し、破棄しているが、会報には、思い出深い記事でもあるので、私に

振り当てられた作品の感想文、雑記の幾つかを、以下にまとめてみることにした。

作品の感想文

第７２回課題作品　田村俊子『女作者』について

冬晴れの１２月初旬、北鎌倉東慶寺の境内に建っている田村俊子の墓所と文学碑を訪ねた。自然石の碑には『女作者』から抜粋した次の句が刻まれている。

この女作者は
いつもおしろいをつけている
この女の書くものは
たいがいおしろいの中から
生まれてくるのである

苦むして、年月を経てもなお、碑に彩られた薄紅色は失われることなく、おしろいの匂いが漂ってくるようなまめかしい幻想におそわれた。これが俊子の文学なのだ。

大阪朝日新聞の懸賞小説に「あきらめ」という題名で応募した小説が入選し、華々しく文壇にデビューしたが、３０歳を過ぎたころから、小説を書くという創造力が枯渇して書けなくなる。書けないということは、作家にとって最大の危機である。それでも「小説家」であることに、執着する女の、もはや「肉のついた一言」も、「血の匂いのする半句」も出てこない白紙の紙面、息も絶え絶えになって、畳の上を転げまわり、書けないと絶叫する。その懊悩が生々しく読者に伝わってきて切ない。壮絶な格闘がそのまま『女作者』という作品に昇華して、田村俊子の代表作として、読者を戦慄させるのである。

年々、新しい文学作品が発表され、高名な賞の受賞者が続出し、目まぐるしく流れていく時代、明治の末期から大正にかけて活躍した田村俊子の名は忘れ去られているかもしれない。しかし、時代を超えても咲き続ける大輪の華、田村俊子の『女作者を読み、改めて記憶にとどめるのである。

幸田露伴の門下生であった田村松魚と結婚。『木乃伊の口紅』『生血』など、官能的な秀作を発表したが、３４，５歳のころから書けなくなり、新しい恋人、鈴木悦の後を追ってバンクーバーにわたり、１８年間過ごす。悦の死によって帰国。その後、上海に行き、脳溢血で急逝する、６１歳であった。

短篇小説『女作者』は大正２年「遊女」と題して「新潮」に発表。同年改題『女作者』と改題して発表した。

明治１７年生まれ、昭和２０年没。北鎌倉東慶寺に眠る。

第７６回課題作品　葉山嘉樹『淫売婦』について

大正末期に、葉山嘉樹によって書かれた『淫売婦』という、現代では聞きなれない（差別語として廃止されているかもしれない）、おどろおどろしいしい題名を持つこの作品の結末は、予想に反して大変にヒューマニステックなものであった。

主人公の「私」が、繁華街の裏町をぶらついていると、いかがわしい３人組の男に声を掛けられる。あとを附いて行くと、倉庫のような暗い建物に、病み衰えて悪臭を放つ全裸の女がベッドに横たわっていた。男たちは好きにしていいよ、といって姿を消す。私は女を商売にして金を稼いでいると思い、義憤に駆られて彼女を救いだそうとするが、実はそのようにして稼いだ金で女の薬を買い、女の面倒を見ていることを知る。

彼らは皆、仲間であり、女は３人の男たちの好意に感謝をしているのであった。「お互い生きていれば何かの役に立つこともあるだろうという空頼みでおれたちは生きている」と、男たちは言う。「私」は淫売婦のなかに「殉教者の姿を見、また、差別階級の一切の運命を象徴している姿をみるのであった、と作品は終わる。まさにプロレタリア作家として葉山嘉樹がもっとも主張したかったテーマであろう。社会の底辺にあっても希望を持ち、協力して生きていく姿に主人公の「私」は思わず涙を流し、我々読者もまた彼らのなかに希望の光を見出すのである。

葉山嘉樹は明治２７年、福岡県生まれ、早大予科文科を中退。様々な職を経て、明治専門学校に勤務。ロシア文学に没頭する。その後名古屋新聞に勤務。社会部記者となり、組合運動にかかわる。文芸戦線同人となって作家活動に入る。『海に生くる人々』など、多くの佳作を生んだ。脳溢血で５１歳の生涯を閉じた。

第９６回課題作品　田久保英夫著『髪の環』

一度読んで、三田文学系の、抑制のきいた上品な作品だと思った。しかしそれだけでは感想にならないので、もう２、３度読んで、あれと思った。さりげなく書かれた文章の奥に、異常な風景が見えてきて不思議な作品だ。女子寮で複数の女学生が、熟睡している皆子の身体を抑えつけて髪を切るという奇怪な風景。また、「妾」として囲われている母が、実家に帰ることを拒否して、皆子を連れて倉庫に閉じこもり、夢まわし

をし、占いをする。そうして膝にしなだれかかっている皆子の髪を切るというときのセクシャルな臨場感。それらは映像となって妖しい雰囲気で読者をとりこむ。

主人公は、女性が髪を切るというさりげなく、しかも非日常的な行為の中で、理性を失うのではと思ったが、髪の毛で環を作るところで余韻を残して作品は終わっている。「輪」ではなく「環」としたところに深い意味があるのか、一切触れていない。得体の知れないものに取りつかれる作者の、それでいて、ストイックな在り方が作品を清冽なものにしているとおもう。また、皆子という思春期の女性の、エキセントリックな魅力もよくでていて、小さなテーマの中に計り知れない心理を描いていて、リアルでありながら幻想的でもあり、その対比が見事だと思う。

田久保英夫は昭和３年東京生まれ、慶応大学仏文科卒、２９年、第３次三田文学にかかわり、詩、小説、放送台本などで広く活躍した。４４年「新潮」に掲載された「深い川」で芥川賞を受賞。その他、「触媒」で芸術選奨、「辻火」で川端康成賞、「海図」で読売文学賞を受賞した。

第１００回課題　堀田善衛『時間』

読書会の会員になって１０年、様々な作品に接することができた。その中で特に印象に残ったものを一つ上げることは難しいが、１００冊記念で取り上げた堀田善衛の『時間』は衝撃的であり、深く心に残る作品であった。

日本にとっては負の歴史と言える南京虐殺を、それに立ち会った一中国人の手記という形で描いているが、堀田善衛が、加害国の日本人であるが故に特異な作品であり、読者である私たちの内省を促すものであった。

主人公、陳英諦は、南京に侵略してきた日軍（日本兵）によって妻子を殺され、姪をヘロイン中毒にされ、彼が築いてきた生活のすべてを失うが、知識人としての彼は、殺戮の限りを尽くした日本兵を沈着に観察している。

「殺、潦、姦」に明け暮れた三週間、南京陥落の日々に、英諦の怒りが最高潮に達したときに、幻想として現れる中国の大自然、紫金山の上には悠久の時間が流れている。「（略）この悪夢に包囲された世界にも、人間の世界全部に通ずる時間が存在しているのだ」と、彼は極限状況の中に流れる「時間」を、ひょっとして人生は長かったり、短かったりする時間の着物を脱いでいるのかもしれない」と自分に納得させる。

南京は陥落し、妻子を失った彼は地下室で諜報活動をつづけながら、日軍の桐野中尉の下僕として日本人を観察し続ける。

「これを書くにあたって私のこころがけていることは、事件を戦争の話術、文学小説の話術で語らぬことだ」と言っているように、自分の感情を生々しく表現することを自制して、観念的、思索的、形而上学的に一中国人が経験した虐殺の現場を淡々と扱っているのが、かえって英諦の苦悩を浮き立たせている。読み通して、残虐の果てにもなお、それによってつぶされることのない大自然、そして人間の可能性を、知的に描いた堀田善衛の力量に感銘した。

尚、この小説は、東京裁判の南京虐殺の記録を読んで、発想したものと言われている。

堀田善衛、１９１８年富山県生まれ。慶応大学仏文卒。昭和２０年、派遣されて上海へ。『時間』は１９５３年年発表。

『広場の孤独』で第２６回芥川賞受賞。毎日文化出版文化賞、その他受賞作が多い。

２００８年没。

第１１０回課題作品　平野啓一郎『マチネの終わりに』

仄暗い高級なバーのカウンターに流れる「アランフェス協奏曲」を聴きながら、上等なワインに酔いしれているような読後感であった。天才バイオリニストの蒔野聡史と国際ジャーナリストの小峰洋子の哀切に満ちた恋物語。

出会いの瞬間に、４０歳という年齢がお互い人生で２度と巡り合えないほどの人だということも読者に伝わってくる。相手を想う心情は微に入り細にわたって描かれていて単なるエンターテイメントではなく、重厚な恋愛心理小説になっていると思う。

運命的な出会いは、一通の携帯電話のメールによってこわれてしまう。どうして直接会って話さなかったのか、と単純な疑問がわく。インテリの弱さであり、携帯電話のもたらすネット社会の落とし穴であろうか、結ばれることのなかった２人だが、彼のニューヨーク公演のあった「マチネの終わりに」セントラル・パークの池のほとりで再会する。２人は何を語ったのか、未来に向かっていくのだろうか、読者の想像にゆだねられて物語は終わる。

余韻に浸って私は２杯目のグラスを手にして、「幸福の硬貨」に耳を傾ける――。

平野啓一郎はどんなジャンルの小説でも書ける作家

だと思う。技巧的であり、知的な初期の作品『日食』から『一月物語』『葬送』を経て、現代の世相を扱った『決壊』や『ドーン』など、さらに「あなたがいなかった、あなた」など前衛的で、実験的な小説も発表した。今回の『マチネの終わりに』の好評でさらに幅広い読者を獲得することだろう。三島由紀夫の再来と言われ、研究書も多い。

（その後、「ある男」「決心」など作品のスケールは広がり、純文学作家の最高峰に位置する作家だと思う）

身辺雑記

第７号　２０１５年　７月

瀬戸内寂聴の気力。

５月１４日、ＮＨＫ総合テレビのクローズアップ現代に久し振りに瀬戸内寂聴が出演していた。５月１５日で満９３歳になるという。背中が丸くなって、其れなりの体型ではあったが、相変わらずの口達者で好色な目元も以前のままである。１年前に胆のうがんの手術をして寝込んでいたが、見事に乗り越えてペンを持つ生活に復帰したらしい。

再起不能となってしまいそうな状況だったのに、さすが寂聴の肉体力、精神力には脱帽である。国谷キャスターを相手に、これからも色っぽい小説を書きたいと意気込みを語っていた。理想的な死に方は、ペンを持ったまま机に突っ伏して終わることだという。役者は舞台の上で死ねば本望というような、職業意識に徹しての発言だろう。寂聴ならおそらくそれも可能だろうと思わせる迫力があった。

書店の店頭には「老後の生き方」について書いた作家や評論家の書物がならんでいる。それらの何冊かを読んで痛感することは月並みながら高齢になっての心身の不調は、医者や薬や、周りの人たちに頼るのではなく、本人の気力、自分を律する気構えをしっかり持って生活をすることが大事だということである。つい無為に流されているわが身を反省している。

寂聴は恋愛小説に止まらず、丁寧な取材を経て、多くの伝記小説を書いた。革命に生きた女性が多い。『田村俊子』、『美は乱調にあり』、『諧調は偽りなり』、『余白の春』、『遠い声』『かの子繚乱』、『彼岸まで』、『孤高の人』その他、多数。それらに私は寂聴が愛だけに生きた女性ではないことを感じる。

第１１号　２０１１号

羽生結弦の魅力。

フィギュアスケートの世界チャンピオン羽生結弦の大ファンである。

アスリートとしての闘志を胸に秘め、努力によって磨き上げた技術もさることながら、氷上で舞う姿の美しさ。長い手足とほっそりとした首筋、切れ長の目。「氷の精」とでもいえるような妖しいまでの天性の美貌は、つぼみが開花して、絢爛たる華となっていく人生の中で、最も清冽な１０代の移り変わりを私達に見せてくれる。

この時期の少年の美しさはいつの時代にも文学の題材になった。トーマス・マンの『ベニスに死す』のタジオ少年が浮かぶ。

羽生結弦から受ける幻惑が、長年にわたって私の愛読書である高橋たか子の『人形愛』を思い起こさせる。

夜な夜な、小説の主人公「私」は夢に出てくる等身大の蝋人形の美少年に「玉男」と名付け、愛撫する。愛撫するごとに人間のように生々しい存在となっていく――。私にとっても夢の中の蝋人形、「玉男」が、現実の「羽生結弦」と重なって、私も小説と一体化して夢見心地で彼に入れ込んでいるところである

高橋たか子は『邪宗門』や『悲の器』など、壮大な作品で知られる高橋和巳の妻で、夫に匹敵するような名作を数多く残した作家である。

第１６号　２０１７年

「忘却の彼方」

先日、「アミュー厚木」の映画館で、２０１３年に公開された独逸映画「忘れな草」を観た。ロマンチックな物語を連想しそうだが、全く裏腹の内容だった。

人生の晩年に時として訪れる「何もかも忘れてしまう認知症患者」のドキュメンタリー映画である。監督と脚本を手掛けたのは作家でもあるダーヴィットで、認知症を発症した母の介護の日々を克明に描いたものである。

母、グレーテルは若いころはテレビで活躍し、政治的関心も深く、女性の社会進出の先鋭的な存在であった。

大学教授のマルティと結婚をし、その後も「革命の母」と呼ばれるような政治的闘士であった。それが、７０歳を過ぎたころから記憶があいまいになり、「アルツハイマー型認知症」の診断を受ける。夫のマルティは大学教授の職を辞して、介護に没頭する。息子のダ

ーヴィットは父の介護を手伝うために帰宅し、友人のカメラマンと一緒に、母の病状の日々を映像に記録する。

かっての、聡明な面影は消えて幼児に帰った母の、悲惨な姿をうつしだしてはいるが、映像に残酷さはなくむしろ微笑ましさがあるのは母と息子の強い絆があるからであろう。

認知症はいまや世界的な問題のようである。現在の日本の患者数は４６２万人、軽度をふくめるとその倍ぐらいなり、更に２０２５年には７００万人に達するのではという。この事実は、８０歳を過ぎた私にとって脅威である。予防策がないのも不安だ。しかし、周りに迷惑をかけているという自覚もなく、すべてを忘却の彼方に押し去り、無我の境地で本人は幸せではないかと想像する。

昼の静寂をぬって、市役所から拡声器の放送が響くことがある。「市役所から申し上げます。本日〇〇さんが行方不明になりました。お心当たりのあるかたは最寄りの警察署までお知らせください」

〇〇さんの脳裏には、きっと幼いころに駆けまわった大自然がいっぱいに広がっていて、魂は高揚しているに違いない。

２０２２年　６月

あつぎ「読書会21」会報
2016年10月27日発行　第12号
皆で立てた「金字塔」
編集委員　根来潔子
読書後の感想と著者について
編集委員　小畑友市
第103回　深沢七郎著「笛吹川」
第104回　中村彰彦著「村の語部」
第105回　幸田露伴著「五重塔」
「読書活動の記録」
「文学散歩の記録」
編集後記とお知らせ
会報編集委員会
根来潔子
小畑友市
中山田和子